

文化庁「日本博」企画委員会（第9回）議事要旨

【日時】

令和3年1月19日（火） 15:00～17:00

【場所】

文化庁 特別会議室（旧庁舎2階）

【委員出席者】

織田紘二委員，河村潤子委員，熊倉功夫委員，コシノジュンコ委員，小松大秀委員，島谷弘幸委員，高階秀爾委員，根立研介委員

【文化庁】

宮田長官，出倉審議官，梶山参事官，安井参事官，廣野新文化芸術創造活動推進室長

事務局から資料に基づき進捗状況の説明。

当日欠席委員の意見紹介後，各委員等による意見交換が行われた。

（当日欠席された委員から、事前に伺った意見）

- コロナ禍でも関係者が頑張っていること、苦勞し、模索しながらやっていることに対して評価をしたい。これから先も大変な状況が続き、苦勞もあると思うが、工夫の検討を進めて行ってほしい。
- コロナと日本博の関係が重要。取り組みとして、制約の中でどうしていくのかだけではなく、コロナ禍において日本博が出来ることを考えて行ってはどうか。
- 過去をみても、パンデミック後に新たな文化が生まれている、ということ踏まえ、200年後の未来から逆算をして、今こういうことがあったのだ、と残せるようなことに取り組めないか。

(各委員等による意見交換、主な発言は以下の通り)

- オンライン配信では「映像で見るのも楽しいが、実際のものを見るのはもっと楽しい」ということを、映像を通じて訴えていくことが重要。「観てみたい、食べてみたい、そこに行ってみたい」という気持ちを起こさせるような配信に繋げていく必要がある。
- オンライン配信は、見る人、聞く人が「時間と距離を越えられる」というメリットがあること、リアルで見に行くにはまだ敷居が高いと思っている初めての人や、若い人たちなどに「まずは見てみる」といったきっかけづくりになっているが、やはりリアルに参加して欲しい、本物に触れるところに戻ってきて欲しい、ということもあり、将来のリアル参加に繋がるものにもなってほしい。そのため、企画自体が「質が高くて良いもの」をきちんと出す、といったことも大事であり、一過性のものでは次に繋がらないため、次は何がある、ということに繋がっていければよい。
- 展覧会ではものを見せるだけでなく、日本博のテーマでもある〈自然〉との繋がり、材料の作り方、扱い方についても周知する必要がある。技法一つとっても、コンテンツで実際に見せて、同時に展覧会やオンラインで示すことによって、日本の文化の持つ〈自然〉との繋がりを良く理解していただける。
- 茶の儀礼、食の出し方やいただき方、華の飾り、きものの着付けなど、日本の文化・芸術の重要なポイントを知らせるための機会として、展覧会をやっていく必要がある。
- このコロナ禍でも、海外で展覧会をやろう、という企画もある。大変厳しい状況ではあるが、こういう動きを止めてはいけない、と思う。積極的に日本文化を海外に持っていく必要がある、と思う。
- 展覧会などが今後どうなっていくのかが不安要素としてある。新しいビジネスモデルを構築していく必要性があるのではないか。
- 新しい分野融合や連携が出来ていることが、日本博が後押し出来ていると思う。
- コロナにより、縮こまらせたり、細くしてはいけない。日本を紹介する、日本の文化や美意識をもう一度見直す、といった行いは、こういう状況であるからこそ続けていくべきである。
- これだけの緊急事態の中で、日本博でやってきたことをきちんと記録やアーカイブとして残し、今後の活動としなければならない。そのためにも、アーカイブ、映像、紙媒体も閲覧できるなど、将来的に活用できることを考えた、色々な情報を得ることが出来るシステムを開発していただきたい。
- 食文化について、日本博の中で色々な形で取り上げていただけるとありがたい。

- 今は、食文化も含めて、生活文化が大きなテーマとなっており、生活に即した様々な文化をもう一度総合的に見直していくべきである。生活文化という観点で日本博の次の企画が生まれ、我々日本人自身が日本の良いものに気が付くチャンスになるのではないか。
- 文化庁では、文化の活性化、文化を使った地方誘客、地方活性化、といった取組をしているが、それぞれの取組を別々に点と点で行うのではなく、面として「繋がる」形で行えば、とても効果的となり、結果、文化が核となってインバウンドにも国内需要にも繋がっていくのではないか。
- コロナによって、この先どう対応をしていいか迷っている事業団体に、積極的に文化庁が助成をし協力をする、といった後押しを、日本博を通じてやっていただき、自信を持たせてあげて欲しい。
- 日本博はプロジェクト支援であり、広報の一環として、継続的に色々な事業が出来るところを、日本博の一つのグループとして広報していく、ということも考えていいのではないか。そのために、事業団体にいいコンテンツを日本博全体の中に出していただけるよう、働きかけをしていただければと思う。
- インバウンドが減少している今でこそ、もっと積極的に海外へ向けてアピールするコンテンツ作りが必要。
- インバウンドの需要ということで日本博はスタートしたと思う。今はコロナによってインバウンド需要が見込めない状態ではあるが、結果的には、色々な事業が国内需要喚起に繋がっている。そのような意味で、日本博がやってきた事業は、国内需要喚起、地方誘客、地方の活性化にこれからも繋がっていくのではないか、と考えている。
- 今までインバウンドを大変意識していたが、今は日本人が日本に目覚める時代ではないか、と思う。日本の文化を背負って海外へ出向けば、もっと素晴らしい感性が生まれると思う。日本の感性や品性を、自信をもって世界にきちんと発信して行くべきである。
- ジャポニズム2018が「フランスにおける日本年」であったように、特に今は外国へ出ることが出来ないため、日本博を「日本における日本年」と位置付けた方がよいのではないか。
- 日本博は大人の世界、という感じがする。もう少し子供たちにスポットをあてるのもありではないか。例えば、学校の課外授業で取り上げ、それがきっかけで日本博を覚えるようになった、など。
- 未来のある子どもたちに日本の文化、日本博というものを覚えてもらう、目覚めてもらう、そのチャンスを作るのは如何か。

(事務局より)

- このコロナ禍に於いても、出来るだけ多くの方に日本博を見ていただくため、又、事業を円滑に行うために、事務局としても出来る限りのことをやってまいりたい。
- 今までの成果については、アーカイブを行うとともに、これからの成果についても、全体として広がりを見せるような残し方をしていきたい。
- 様々な方策を活用して、文化芸術関係の方々を支援してまいりたいと考えている。その中で、日本博が一層効果をあげていくことを肝に銘じ、事務局として取り組んでまいりたい。